



毎月十五日発行 所大社 宗像 宗像 電話 0940-62-1311代 定価 一年送料共 1000円

神具・装束 株式会社 井筒 福岡店 福岡市博多区東公園二丁目三番八号

小雪舞う中

節分祭齋行

鬼は外・福は内



「豆打の儀」を行うのである。神島権吉司の先導により「鬼は外! 福は内!」の第一声が...

「豆打の儀」を行うのである。神島権吉司の先導により「鬼は外! 福は内!」の第一声が...

境内の樹々が残雪を頂き、



今年の節分は日本全国雪に覆われた。今冬一番と云う大寒気がシベリア大陸より南下し全国に雪雲が広が...

で殿内は埋まった。新年の開運厄除と国家・皇室の安泰を祈る太田宮司の祝詞が奏上され、各代表が玉串を捧げ一年の厄除開運を祈った。引続き祈願殿正面階段上にて、天地の邪気を清める呪法の儀が神職二人で行なわれた。

餅・菓子等を撒いて「豆打の儀」を行った。階下には多くの参拝者が集り、撒かれる福豆・福袋を寒風小雪の中拾い求め合う声で賑わう中、豆打を終除を祈った。



玉砂利が白くなった庭に、氏子の人々が大勢集い、拝殿より今年遷座を迎えたい年男の人々が、袴姿で撒く福豆を競い合っ...

「節分」は、一年の四季を分ける日である立春、立夏、立秋、立冬の前日を目指すので、この中で立春の前日は二十四節気の起点すなわち年の初めであることから重視され、特にこの日だけが節分といわれて行事がなされるようになった。

これを追い払う行事を「追儺」と呼び、「オニヤライ」「ナラナイ」等とも称される。中国の古俗に由来するわが国では、初春に行われる穀物の種おろし行事、若しくはその様子を演じる豊作の祈り行事が伝承された。

「節分」は、一年の四季を分ける日である立春、立夏、立秋、立冬の前日を目指すので、この中で立春の前日は二十四節気の起点すなわち年の初めであることから重視され、特にこの日だけが節分といわれて行事がなされるようになった。

「節分」は、一年の四季を分ける日である立春、立夏、立秋、立冬の前日を目指すので、この中で立春の前日は二十四節気の起点すなわち年の初めであることから重視され、特にこの日だけが節分といわれて行事がなされるようになった。

「節分」は、一年の四季を分ける日である立春、立夏、立秋、立冬の前日を目指すので、この中で立春の前日は二十四節気の起点すなわち年の初めであることから重視され、特にこの日だけが節分といわれて行事がなされるようになった。

「節分」は、一年の四季を分ける日である立春、立夏、立秋、立冬の前日を目指すので、この中で立春の前日は二十四節気の起点すなわち年の初めであることから重視され、特にこの日だけが節分といわれて行事がなされるようになった。

「節分」は、一年の四季を分ける日である立春、立夏、立秋、立冬の前日を目指すので、この中で立春の前日は二十四節気の起点すなわち年の初めであることから重視され、特にこの日だけが節分といわれて行事がなされるようになった。

「節分」は、一年の四季を分ける日である立春、立夏、立秋、立冬の前日を目指すので、この中で立春の前日は二十四節気の起点すなわち年の初めであることから重視され、特にこの日だけが節分といわれて行事がなされるようになった。

「節分」は、一年の四季を分ける日である立春、立夏、立秋、立冬の前日を目指すので、この中で立春の前日は二十四節気の起点すなわち年の初めであることから重視され、特にこの日だけが節分といわれて行事がなされるようになった。

「節分」は、一年の四季を分ける日である立春、立夏、立秋、立冬の前日を目指すので、この中で立春の前日は二十四節気の起点すなわち年の初めであることから重視され、特にこの日だけが節分といわれて行事がなされるようになった。

「節分」は、一年の四季を分ける日である立春、立夏、立秋、立冬の前日を目指すので、この中で立春の前日は二十四節気の起点すなわち年の初めであることから重視され、特にこの日だけが節分といわれて行事がなされるようになった。

「節分」は、一年の四季を分ける日である立春、立夏、立秋、立冬の前日を目指すので、この中で立春の前日は二十四節気の起点すなわち年の初めであることから重視され、特にこの日だけが節分といわれて行事がなされるようになった。

「節分」は、一年の四季を分ける日である立春、立夏、立秋、立冬の前日を目指すので、この中で立春の前日は二十四節気の起点すなわち年の初めであることから重視され、特にこの日だけが節分といわれて行事がなされるようになった。

「節分」は、一年の四季を分ける日である立春、立夏、立秋、立冬の前日を目指すので、この中で立春の前日は二十四節気の起点すなわち年の初めであることから重視され、特にこの日だけが節分といわれて行事がなされるようになった。

「節分」は、一年の四季を分ける日である立春、立夏、立秋、立冬の前日を目指すので、この中で立春の前日は二十四節気の起点すなわち年の初めであることから重視され、特にこの日だけが節分といわれて行事がなされるようになった。

「節分」は、一年の四季を分ける日である立春、立夏、立秋、立冬の前日を目指すので、この中で立春の前日は二十四節気の起点すなわち年の初めであることから重視され、特にこの日だけが節分といわれて行事がなされるようになった。

「節分」は、一年の四季を分ける日である立春、立夏、立秋、立冬の前日を目指すので、この中で立春の前日は二十四節気の起点すなわち年の初めであることから重視され、特にこの日だけが節分といわれて行事がなされるようになった。

「節分」は、一年の四季を分ける日である立春、立夏、立秋、立冬の前日を目指すので、この中で立春の前日は二十四節気の起点すなわち年の初めであることから重視され、特にこの日だけが節分といわれて行事がなされるようになった。

「節分」は、一年の四季を分ける日である立春、立夏、立秋、立冬の前日を目指すので、この中で立春の前日は二十四節気の起点すなわち年の初めであることから重視され、特にこの日だけが節分といわれて行事がなされるようになった。



東京神社庁が毎月発行している「東神」という月刊誌新年号に、卯(兔)について註文があったので転載した。

卯(兔)は字形が両側に開いて兔の耳に似ているという発想から、十二支ではうさぎ年をあははめたいという。年が改まるたびに、鳥兔の感を感じ強くなる年代は還暦からのよである。「金烏玉兔」の略が、鳥兔。それに勿勿(速)の音が意味をつけたのが、鳥兔勿勿(速)の中金の鳥が居る、卯(兔)の中に白兔の兔が居るといふ伝説から、太陽と月を日月として「日月のたつが早い」ことを表現したものである。「玉兔」の兔は、うさぎの正字で、兔は兎字。兔から派生して安全(めん)にまがれる(ゆる)すの字がある。兔はうさぎのうさぎまった姿を斜め後ろから見た形その姿から尾(一)を取ったのが免(二)に尾をつまめたうさぎ、もがいて尾を人の手に残して逃げた。まぬがれたという意味。免に走(しん)にゆ(二)歩く走る意味をかける。それと、逸(早く)逃げ走る。それと、そらす(意味)などという。兎角卯歳(今年)は、景気という暴風雨から脱免(免)の如く逃れ草木が地面を押しわけて地上に萌え出す状態を示す文字通り卯の年にしたいものである。※.....と記されている。当用漢字現代カナ使用の学力では難解な文章ではあるが、何となく意味がわかる様な気持ちで読んだ。

第四五二回 宗像大社歌会詠草 大野 展 男 選 毎月25日、切 鐘崎 安永 久子 しゃんしゃんと手締めを終えて初せりをしる若者の声は弾めり 曲 天野 玲子 目を閉じて電車の揺れに身をまかせこの安らぎ平和と言はむ 田 久 井上 光 子供らのだんと祭りはいっか絶えさ庭にひそと注連飾り焼く 福 間 中村 勇 山茶花の花吹きさ吹雪夕暖房利かせ来る客を待つ 在 自 佐々木和彦 ひつち穂の枯れてしましと谷地の田に正月の月皓々と照る 大 島 越智 治子 風寒き朝出づれば常風見る海猫群れて波止内に浮く 福 間 池浦十鶴子 勝ち名乗り受くる力士の息荒く目に入る汗を拭ふともせず 八幡西 有吉 陽子 雨止みて香る遠くの木庫の下の蜘蛛の巣乾花つるもの 日の里 大和美田紀 すつきりと葉を落したる栴檀に鈴生りの実ば真空に映し 光 岡 河村 久光 ひたすらに導きの言葉かけきたる過去を思えば涙ぐましく

献米奉告祭

新年の豊作と無病を祈る



五穀豊穡、無病息災、家内安泰を祈念し上げる祭典である。

当日、太田宮司以下神職と共に、氏子奉告使として、女海町神楽の評議員、松本純次氏が奉告された。

神職、奉告使、参列者は定刻午前十一時、館前より、参進し祓舎にて献いを受け本殿へと向かった。

一鼓を合図に平成十一年献米奉告祭を齎す。

宮司が都市内の氏の方々より奉告された献米の奉告と、五穀豊穡、家内安全を祈念する祝詞を奏上し、続いて氏子奉告使による祭詞を奏した。

次に巫女が浦安の舞を奉奏し、宮司、奉告使、氏子会長、参列者代表が神前に玉串を捧げ、新年の豊かなる実を祈念し祭典は終了した。

引き続き氏子会水年動続者の表参式が執り行われ、当社社長・評議員、又沖・中西富泰賛費役員として永

防火訓練「文化財を守れ!!」

大社自衛消防団出動!!

昭和十四年(一九四九)一月十六日、法隆寺金堂燬焼が火災により焼失した。このことを反省し、昭和四十三年に「文化財防火」が制定され、毎年一月二十六日を中心に全国各地で「国の宝」文化財を守れとを合言葉に訓練が行われている。各社寺の自衛消防団の活躍を新聞やテレビ等

で報道、文化財保護や防火管理体制強化の意識高揚が図られている。

当社に於てもこの日、女海町消防団(第一分団)と宗像大社自衛消防団(団長神島隆司以下全職員)との合同防火訓練が実施された。

午前十一時、本殿裏手の森より出火の想定で焚かれ

年御奉仕戴いている遠藤三等氏(天鳥)と、春秋大祭を始め当社の主な祭典の境内に掲揚し御神徳の発揚の一翼をになう「職」を御奉納戴いた小島正弘氏(勝浦)の二名の方に、宮司より感謝状並びに記念品が贈呈された。

祭典、表参式の後、清明殿に於いて恒例の鏡開きが催され多数参加のもと和やかに諸行事は終了した。

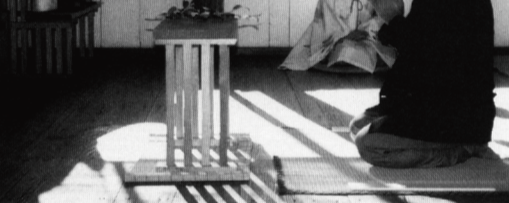
尚、皆機方より奉納戴いた献米は、毎朝の日供祭を始め諸祭典の神饌として御供えし、皆機方の安全と弥栄を御祈り致しております。

PL学園高等学校野球部前監督 中村順司氏夫妻参拝

晴天に恵まれ、恵比須神社祭が齎された正月十日、新しい参拝者で賑う中、PL学園高等学校硬式野球部前監督中村順司氏夫妻が参拝された。

周知の通り中村氏は現在プロ野球・読巨人軍で活躍中の桑田・清原選手をはじめ、各球団の主力選手として活躍している選手を育て、全国制覇を数多く成し遂げられた。春・夏の甲子園を湧かせたPL学園高で高校球児を多量に育てた優れた指導者である。

今回の参拝は、今春より愛知県・名古屋科科大学硬式野球部監督に就任したり、当社御祭神にその奉告をすべく初めて昇殿参拝をな



“110番の日”キャンペーン

折しも新年の参拝で賑う駐車場に福岡県警察本部、警察本所、警察第一、第二、第三、第四、第五、第六、第七、第八、第九、第十、第十一、第十二、第十三、第十四、第十五、第十六、第十七、第十八、第十九、第二十、第二十一、第二十二、第二十三、第二十四、第二十五、第二十六、第二十七、第二十八、第二十九、第三十、第三十一、第三十二、第三十三、第三十四、第三十五、第三十六、第三十七、第三十八、第三十九、第四十、第四十一、第四十二、第四十三、第四十四、第四十五、第四十六、第四十七、第四十八、第四十九、第五十、第五十一、第五十二、第五十三、第五十四、第五十五、第五十六、第五十七、第五十八、第五十九、第六十、第六十一、第六十二、第六十三、第六十四、第六十五、第六十六、第六十七、第六十八、第六十九、第七十、第七十一、第七十二、第七十三、第七十四、第七十五、第七十六、第七十七、第七十八、第七十九、第八十、第八十一、第八十二、第八十三、第八十四、第八十五、第八十六、第八十七、第八十八、第八十九、第九十、第九十一、第九十二、第九十三、第九十四、第九十五、第九十六、第九十七、第九十八、第九十九、第一百、第一〇一、第一〇二、第一〇三、第一〇四、第一〇五、第一〇六、第一〇七、第一〇八、第一〇九、第一一〇番の日



折しも新年の参拝で賑う駐車場に福岡県警察本部、警察本所、警察第一、第二、第三、第四、第五、第六、第七、第八、第九、第十、第十一、第十二、第十三、第十四、第十五、第十六、第十七、第十八、第十九、第二十、第二十一、第二十二、第二十三、第二十四、第二十五、第二十六、第二十七、第二十八、第二十九、第三十、第三十一、第三十二、第三十三、第三十四、第三十五、第三十六、第三十七、第三十八、第三十九、第四十、第四十一、第四十二、第四十三、第四十四、第四十五、第四十六、第四十七、第四十八、第四十九、第五十、第五十一、第五十二、第五十三、第五十四、第五十五、第五十六、第五十七、第五十八、第五十九、第六十、第六十一、第六十二、第六十三、第六十四、第六十五、第六十六、第六十七、第六十八、第六十九、第七十、第七十一、第七十二、第七十三、第七十四、第七十五、第七十六、第七十七、第七十八、第七十九、第八十、第八十一、第八十二、第八十三、第八十四、第八十五、第八十六、第八十七、第八十八、第八十九、第九十、第九十一、第九十二、第九十三、第九十四、第九十五、第九十六、第九十七、第九十八、第九十九、第一百、第一〇一、第一〇二、第一〇三、第一〇四、第一〇五、第一〇六、第一〇七、第一〇八、第一〇九、第一一〇番の日

一話一話 (74)

古代の海上航路 (9)

水部荒雄の所を訪ねて、
「対馬に根を送る船頭をまかせられたが、自らは老齢でもあり、体も衰えてきており航海することには堪えなかつた。」と言つて船取りの代役を頼んだ。

荒雄答へて、「われ、郡を異にするを難と雖も、船を同しすること日は久しい」と云い、船頭役の代りを承諾したと言ふ。

これによつて、荒雄は直ちに肥前松浦郡美津長久崎より船を出して対馬へと向かうが、途中大時化にあい、暴風雨が止むことも無く、ついに難破し船は海中深く沈み、荒雄は没したと言われたい。

この機を由で詠われた白木部荒雄の歌一首は、詠み人知らずではあるが、人情に厚い荒雄への断しがたい想いと、荒雄への鎮魂の叫びともいえる。

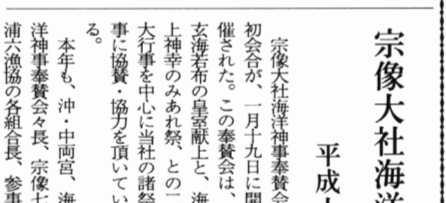
この根底にあるものはやはり、海を知っている者や、航海術に長けている人々の、日常往々来々している垣根がない共同生活の表われをなしていると言へる。この歌は海上生活者を代表する古典の一つであると言へよう。

当時 中国との交流が始まつた、第一回遣唐使船が出発したが、第二回(二二〇〇)年八月である。荒雄の歌が詠まれた神龜中は、第八回遣唐使(養老元年(七一九))と、第九回遣唐使(天平五年(七三三))の中間の頃である。その頃対馬は対朝鮮半島の防衛拠点として、対馬に食糧を搬送する防人船の樞樞、船長に任じた。

津麻呂は樺羅郡志都郷白

の初期消火の体制は合格点であるとの講評を受けた。

国の貴重な財産を守る文化財を大切に、またそれを後世に伝承していく我々の責務の重さを再認識して本年の防火訓練は無事終了した。



宗像大社海洋神事奉賛会 平成十一年度初代会

宗像大社海洋神事奉賛会初代会が、一月十九日に開催された。この奉賛会は、玄海若布の皇統上と、海上神幸のみあれ祭との二大行事を中心に、当社の諸事に協賛、協力を頂いている。

本年も、沖・中西宮、海洋神事奉賛会長、宗像七浦六漁協の各組長、参事

が出席し、まず大漁祈願祭を齎行し、海上安全と大漁満足を祈念された。

祭典終了後、会議を開催。当社太田宮が挨拶を行い、若布の芽生えが悪い為、採取が遅くなる事が予想されるので、状況としては三月の献上より無事秋祭の御協力により無事御礼申祭が齎行した事を御礼申し上げ、本年の事業協力をお願いした。続いて村田海

文通より 世紀末とらつた本年、世間では凶悪な犯罪が多発しているが、通報の有無如何によつては未然に防くことができる事件も多い。

当地方では、少年を非行から守ろうとボランティアで活動されている玄海町少年育成パトロール部会(通称「ふくろう部隊」)があるが、宗像東と相互の連携で青少年非行問題に於て確実な効果を得ている。地域に住む人々の協力無しでは事件・事故を防ぐことは難しいと言ふながら、パトロールを一枚一枚配り、犯罪ゼロを願う署員の防犯に寄せる熱い想いが強く感じられた一日であった。

洋神事奉賛会長より、若布献上とみあれ祭は重儀であるので、各漁協一致協力して取り組んで行きたいと挨拶された。

次に議事に入り、平成十年若布献上の報告が行われ、本年度の担当者を紹介し、協議が行われた。

今年度の随行は、神楽、地ノ島漁協代表者とする事が決定された。献上日時は、今年度の協賛者として、若布の芽生えが悪い為、採取が遅くなる事が予想されるので、状況としては三月の献上より無事秋祭の御協力により無事御礼申祭が齎行した事を御礼申し上げ、本年の事業協力をお願いした。続いて村田海

出光店主室教育

第五十七期 宗像研修報告

出光ワレジット営業部
村崎重明

十二年振りの宗像様の印象は、以前とは比較にならないほど素晴らしいものであり、というものは、私は出光興産に入社して最初の赴任地が福岡支店であったために、在勤中に献茶祭の奉仕やその他の仕事で十回程度訪れたことがあったからです。

当時は、宗像様の由来や歴史を知らずに参拝しているのみで表面的に接しているに過ぎませんでした。しかしながら、今回は、朝拝・大祝詞を行って日供祭・鎮魂高宮での清揚奉仕などを体験するとともに、太田宮司様をはじめ他の講師の方々のご講話をおして宗像様の格式・由来・歴史・祭式作法などを学び、そこで感じたことは自分にとって生誕されることのできない貴重な財産になりました。

研修で心に残ったことの一つに、大島の沖津宮通拝所から沖津島肉眼でとら



えることができたことが挙げられます。前日からの雨天で、まずその姿を拝めないととあきらめていたところ、ほんの数分ではありますが、その影が輝いて感じました。研修中に沖ノ島が拝めたのは七年振りくらいだということ、私はそのお話を聞いて感謝の気持ちがいっぱいになりました。

沖津宮での研修では前述したあらゆる実習とおして自分が忘れていた気持ち、具体的にはけがれなき純粋な気持ちを思い出させていたことができました。

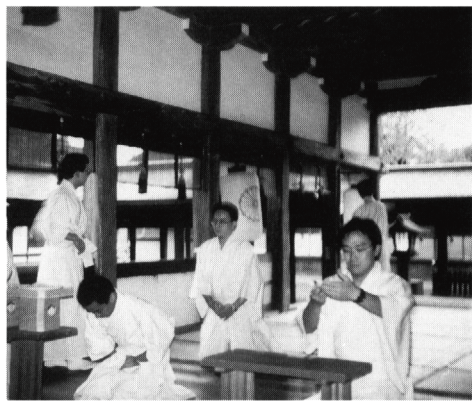
今後はこの気持ちを忘れず、大切に生きていこうと決意しました。

また、私の家は昔から毎年ある社に参拝しており、私自身もこの頃から参拝をこく自然に行っていました。しかしながら、今までは祭式作法を知らずに神様を拝んでいました。今回、正しい祭式作法を学び、今後は自信を持って社に参拝したいと考えています。

出光石油化学工業店
中島光茂

研修当初は興味本位の部分があったが、研修が進むにつれ神道の素晴らしさを体感した。

第一に感じたことは、神道が「日本人の心そのもの」であることだ。



神は、絶対的なものではなく、人と同じように荒ぶる面も滑稽な面を持っており、そういう面を否定せず、良心に従い誠の道を進むことが大切である。また、神とは頼るものではなく私たちが一人一人の心の中に存在し、生活における種々の行動の規範となるものであり、それが故に神を敬うことは、自らの行動を律することにも自らに忠実であることと痛感しました。

次に感じたことは、自然との調和の重要性です。朝の境内清掃時、朝もやのなかで本殿を仰ぐとき、周囲の木々と静々と建物が渾然一体となって融合している姿があった。さらに、夜の高宮で薄明かりの月光

の下、静寂と暗闇がかえって自分の「生」を浮かび上がらせ生きているということとを改めて実感させられました。

また、日供祭の作法等であるが、最初は慣れない正座等で苦痛であったが慣れてくるとこの作法は人の自然な（無理・無駄のない）動作であることがわかりました。日本の二千六百年に亘る文化はつまるところ自然体であるためにも生き生きていることだ。

きとしたものに感るのだと思えました。

これらの貴重な体験を踏まえ、神道という日本の素晴らしい文化を家族や周囲の人々に伝えていきたいと思いました。

出光興産中央研究所
町田雅志

とにかく美しい事に感動しました。研修の空き時間を見つけては境内を散歩させて頂きました。私の好きな眺めの一つは手水舎と祇舎の間あたりの位置から儀式殿を見る図です。晩秋の鮮やかな紅葉が建物や周囲の落ち着いた色に映え、たたみ美しく、ぼうっと見とれてしまいました。もう一つは齋館の前から神門を眺



出光興産中央研究所 宗像研修で私が一番感じた

める風景です。裏の山々と宗像大社が一体となり、自然の懐に抱かれる心地がして心が洗われる感じがしました。このお話を聞いていた宗像大社の方々の日々の努力には頭の下がる思いです。

俗世に暮らす為の信仰心や宗教心をあま持たざるがせ私ですが、この美しさには心を強められる何かを感じました。研修の短い期間とはいえ、白衣白袴を着用して美しいものに触れ、自然を含め自分の周囲に感謝する心と祈る心を育むことが生活できた事は貴重な体験だと思えます。この宗像大社境内での研修生活を通じて、今までの自分の人生で自分の中にたまった「心の垢」の様なものを感じました。ご講話があった「神道は赦へに始まり赦へに終わる」という言葉の意味が少し解ったような気がしました。これからの自分の人生と家族の生活における日々の「赦へ」について考え、実践しようと思えます。

毎夜の鎮魂では、つらいけれども自分の中での精神を集中し、息を振り返る事が大切であることに気が洗われる気持ちになりました。長い人生、一度はこのように時間を停めて自分、又他人に対して心配りが出来ると思いました。又、神社祭式作法について学び、体験した事は神道についての理解を深めたと同時に、神を敬うに心付れた心持ちです。

私はこの研修を通して神道とは、日本人として大切なものは何かを真様に教えていただきました。この地で学んだ事はこれからの人生にとって必ず役立つと信じて行動して行きます。又次代に伝えて行く事が私の務めであり、お世話になった方々への恩返しだと思っております。

第42回 宗像マラソン大会

寒風の中燃える健脚



- 第四十二回宗像マラソン大会が二十四日、当社をスタート・ゴール地点開かれた。この宗像マラソンは新人ランナーの登壇門として知られている。
- 参加者約八百人の選手が3・5・10キロの各コース六種目で健脚を競った。上位成績は次の通りです。
- 3キロの部
 - 一位 相良 実沙 (篠栗中) 10分27秒
 - 二位 田代 瑠美 (粕屋中) 10分35秒
 - 三位 藤田 順子 (城山中) 10分51秒
 - 中学生男子
 - 一位 石松 照章 (城山中) 9分11秒
 - 二位 塚本 秀志 (須恵中) 9分19秒
 - 三位 立石 慎士 (城山中) 9分23秒
 - 5キロの部
 - 一位 武友 麻衣 (飯塚高) 18分42秒
 - 二位 斉藤 智恵 (香椎高) 19分0秒
 - 三位 長岡恵美 (宗宇治中) 19分11秒
 - 高校男子
 - 一位 木野 行純 (飯塚高) 15分14秒
 - 二位 原田圭夫 (東海大五) 15分54秒
 - 三位 丸山光郎 (九国高) 15分59秒
 - 一般・学生男子
 - 一位 星野 和久 (九松電) 15分48秒
 - 二位 尾原本正 (眞釜機) 15分51秒
 - 三位 大久保信治 (基マラソン) 16分1秒
 - 10キロの部
 - 一位 山田 吉秀 (福岡警) 31分23秒
 - 二位 木綿 一誠 (飯塚高) 31分23秒
 - 三位 今津 淳一 (福岡警) 31分5秒
 - 一般・学生女子
 - 一位 山田 吉秀 (福岡警) 31分23秒
 - 二位 木綿 一誠 (飯塚高) 31分23秒
 - 三位 今津 淳一 (福岡警) 31分5秒

大社の奉納刀 (二)

仙 寿

三浦県志摩郡磯部町にある伊弉諾宮は伊勢皇大神宮の別宮であり天照大神を御祭神とするお社である。恒例のおび臨時の御祭典はすべて内宮に準じて行はれ式年遷宮も内宮と同様二十年毎に行はれている。同宮の神宝であった御鏡も銅墨造御太刀と同様に月山貞勝の作である。御鏡の形状は両端の剣に似ているが穂先からふくらみとふくらみ次第にくびれて重ねの厚い鍔元に



は装飾的な切れこみを両側に二つつけています。鍔には無く柄の先端に付けた金銅製の球状金具によって支えられて、太い柄は黒漆塗りに唐装の銀平紋が施され、柄の先端から下げられた緋色地の唐草蔓紋錦三又旗には大きな銀三つ巴紋が付けられ櫛にふさわしい威厳を示している。奉製から半世紀を経た昭和五十四年銘が目立って来たので研磨を施した。刃長三十一・三厘先巾五・四厘元巾四・〇厘 鍛え肌は板目に塗目まじりの地鉄に細かく沸出の直刃をいれている。御太刀に比べるとややおとなしい出来である。

に納められている。

- 一、御楯 皇太神宮別宮・滝原宮の御神玉・檜材に黒漆塗の手楯で縦・米三六厘・巾四五厘 厚四・五厘の笠々とした楯である。
- 一、御櫛 豊大天神宮別宮・月夜見宮の御装束。
- 一、御鏡 伊弉諾宮の御祭典。
- 一、白銅製 表面は古法にのっとり水銀で磨かれており、背面には瑞花及鳥の紋様が施されている。黒漆塗りの花銀平紋を施した職造宮

いづれの神宝にも奉製者の銘を入れているが捉えられており御太刀・御鏡共に中心に銘は切っていない。刀剣ではないが同時に下付された御神宝にも触れておこう。

宗像大社歌会

俳句作品集(四六)
(二月) 豆
自由ヶ丘 細川 桐子
洗ひもの干す肩叩く柿落葉

福間 森 清
看板の字の読めるなり紅葉
散る

小笹 山下しづえ
年末や気持をあげるお裾分

藤沢 井上 玄洋
海わたる東方の橋の出入か

日の里 花田いつ枝
鯨鯨の口雑踏の声を呑む

小笹 山下しづえ
金魚は生きておよいで大寒

藤沢 井上 玄洋
立春の日差しに馳む沖の一

日の里 花田いつ枝
あめつちの神々拝す初み空

福間 森 清
真底の静寂を見し大旦

自由ヶ丘 細川 桐子
若水やこしもどうぞすこ

若松 高橋 忠實
正月や年拾おうか捨てよう

東郷 吉田 柳子
燈明の焔しんと朝の賜

東郷 吉田 柳子
沖速く動かぬ漁船冬の雲

東郷 三浦美千代
籬のみ残り家に咲く茶花

東郷 中野 きみ
雀じゃれ茶垣の花こほし

(続)

浜の寄物

133

いししいただし

八月末・鹿角島・吹上
山陽道を上り岡山から瀬
浜から帰ってすぐ翌日には
四国旅行が待っていた。こ
こから南下して土佐の高知
は前かが計画していた家
族旅行で、漂着物ががしで
はないが、太平洋側の海を
見るいい機会でもある。



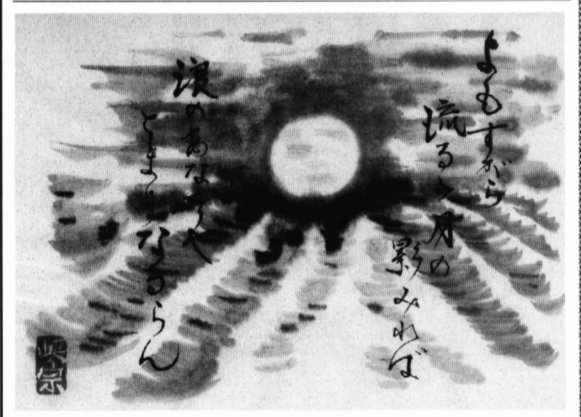
山陽道を上り岡山から瀬
戸大橋を渡り、四国讃岐の
金比羅神社を詣り、高知
へ。坂本竜馬像の桂浜、そ
して南へ下って高知県幡豆
郡大町へ。ここで一泊、
翌早朝には大
方町でホエー
ルウオッチン
グ、午後には
八幡沢がラエ
リでホエール
白樺にあり
入野海岸の砂浜を美術館に
野田一泊三日
大町へ。四国
の車の旅であ
る。私の期待
は、四国の太
平洋側で、長
江大洪水の物
が寄っている
かどうか、ま
たホエールウ

あり、これは差支えと思っ
たが、浜に出て見たら夏の
大雨で、川から流出したよ
うなアシ、ヨシの類が多く
ビニール、プラスチック類
はほとんど目につかなかっ
た。夕食の時間にもなり浜
歩きは途中で切りあげて宿
に戻った。
御早朝、残りの浜を歩い
たが前日と変わりが無い。
中国製ライターやプラスチック
容器類があったが、この程
度では長江大洪水のものど
断定できない。太平洋側は
黒潮支流であり、玄界沿岸
よりも中国製の漂着品(作品
砂浜美術館の採集品(作品
という)からも多いのであ
る。
八時半がホエールウオッチ
ングのための出発時間であ
り、朝食をすませると、
港へ行く。本日は天気晴朗
だが少し風があるようだ。
赤の救急ジャケットを着て
出港を待つ。ウオッチング
は私達家族だけである。二
人のアルバインド女性が乗り
込んできたのは「発見役」
である。船主の二名に二
人並んで座す。「昨日は鯨
はあらわれたが、今日ほど
うでしょうか。」
いざ出発「前方、左右を
注意して下さい。噴気があ
がったら鯨です。船の横に
はボールが泳ぐこともあり
ます」。やがて港から外洋
へ。白波はたつていないが
波はうねりが大きい。私は
乗る前に、五月の沖ノ島参
拜で用意していた酔い止め
の薬を一本持っていたので、
これを飲んだ。
船はどんどん沖の方にす
む。元気がよくなった娘は
は孫人と横になって着い
顔をしている。鯨どころで
娘が近寄って「お父
さんどニール袋もっとう？」
と聞く。後の方では大変な
ことになりつつあるようだ。
家内と娘は一五五円払って
たんだから、なにがなんでも
鯨を見なければと着い顔
をしながら必死になって、
沖を見ている。鯨はあらわ
れない。ただ青い空と海で
ある。
大方沖にあらわれるのは
ニタクジラで、このクジ
ラについて記すと、大きい
のは体長十四メートル、多
くは十二メートル前後で、
背中黒色、体側と腹側の
後部が灰黒色で、外見上
の特色としては、上顎背面
噴気口の前方に、平行な三
本のリジンを「稜線」がある。
通常一頭で行動し、あ
まり大きな群れをつくらな
いという。(鯨とイルカの
フィールドガイド・東大出
版会)

満ちたさわわきて、大海おど
ろおろあらびたり。
とかくするうちに、日も
くれぬ。いと暗きに、いか
がはせんとして、さきに來つ
きたりし舟ども、あはて
て磯に火を著て、爰に爰に
と叫びて、船ありとも
おぼえず。浪のそにや打
いられけん、又は風に放
されて、千百の雷の鳴はた
たくらやうなれば、よも
此島に向て舵を立てはえ
あるまじ、助けに行きま
うまなければ、人々神に
「折」ぎ乞ひのむばかり也。
子の時はかり空少し晴

青柳種信著 瀛津島防人日記(下巻ノ五)

とよめりしもいまにしられ
て、唐和のふきうたの、折
につけておもひ出らるるを、
打すてなめあひ、
月人の
あまの河とを船出して
いづこまりとさして
いづらん
おのれこの四とせ五年のほ
ど、江門(江戸)に在て月
見しに、くさより出で、草
に在るはあれど、こよひの
月にはくさぶくもあらず。
物かはにぞおもひ過ごさ
る。出るも入るも、唯浪の
立さわぐかとのみ見えて、
雲かとまがふ山端もなけれ



はあらわれたが、今日ほど
うでしょうか。」
いざ出発「前方、左右を
注意して下さい。噴気があ
がったら鯨です。船の横に
はボールが泳ぐこともあり
ます」。やがて港から外洋
へ。白波はたつていないが
波はうねりが大きい。私は
乗る前に、五月の沖ノ島参
拜で用意していた酔い止め
の薬を一本持っていたので、
これを飲んだ。
船はどんどん沖の方にす
む。元気がよくなった娘は
は孫人と横になって着い
顔をしている。鯨どころで
娘が近寄って「お父
さんどニール袋もっとう？」
と聞く。後の方では大変な
ことになりつつあるようだ。
家内と娘は一五五円払って
たんだから、なにがなんでも
鯨を見なければと着い顔
をしながら必死になって、
沖を見ている。鯨はあらわ
れない。ただ青い空と海で
ある。
大方沖にあらわれるのは
ニタクジラで、このクジ
ラについて記すと、大きい
のは体長十四メートル、多
くは十二メートル前後で、
背中黒色、体側と腹側の
後部が灰黒色で、外見上
の特色としては、上顎背面
噴気口の前方に、平行な三
本のリジンを「稜線」がある。
通常一頭で行動し、あ
まり大きな群れをつくらな
いという。(鯨とイルカの
フィールドガイド・東大出
版会)

古神、神

(44)

祭りの場と
(祭りの変遷四)
沖ノ島の古代の祭りの場
が、島の南側中腹の谷底に
出来た、小規模の台地の上
であることはすでに述べて
きた。
沖津宮への参道を登って
行き、ここに立ち上り、下から
古代の祭場を見上げると、
そこには巨大な石塔が、並
んで立ち上っている様に
も見える。丁度太古の人々
が天高くから岩を一個一
個と釣降し、並べていっ
たとも
感じら
れるか
ら不思議
議であ
る。
この
感覚や
感情が
古代人
達の、
自分に
出来な
い事に
対する
乞い願いかきた、祭りで
あり祈りである。
この台地の上、口に位置
する一号祭場は、沖ノ
島古代祭りの最終、平安
時代の時期である。島の
祭りは四世紀から十世紀に
かけての六〇〇年の間に、
二十三ヶ所の祭場を繰り返
して行われてきた。古い時代
の祭礼群は、これから台地
の上の方へと行かれ、古い
時期である。
台地は斜形し、奥に行く
に従い高くなる。山の裾の
辺りに本にして願状に開い
た小台地である。一号祭場
の裾あたりからみると、一
番古い時代の岩上祭礼、四
世紀、古墳時代前期の祭
場とは、一四一五メートル
も高さの差があり、下から
上へと祭場を見上げるとい
う格好である。
古来の自然崇拜の原始神
道期の山の神、峠の神祭祀
に於いて山頂や頂での祭り
は無である。全下方で行
い頂を見し方式である。
これが日本の祭りの原点で
あったように想われる。
三輪山の山の岩の下で
は万々が手持勾玉も発見
されている。現代も所々に
水や食物、花などが供えら
れていると聞く。古代から
現代へと続く神祭祀の姿の
現れである。
平野での古民の山岳祭祀
が、山中での祭りから山裾
へ、山
裾での
祭りか
ら山を
離れた
平地か
ら遠く
山を見
上げる
様々方
法での
祭祀へ
と変遷
してい
く。つ

沖ノ島の場合も同様であ
り、島の最高峰の岳での
山頂祭祀はない。
原始神道期の島祭祀は
陸上での山岳祭と同様で
あるといえる。海上での島
と平野からの山である。ど
ちらも一の標式としてそ
の姿を拜む。いわゆる神の
依代である。
遠くからは島も山も、遙
かに拝み見る形であるが、
一祭祀にこはその場その
場の条件に応じて、一個一
個の岩や木など、やはり
神が降り奉る「依代」と

